私の役割は、選手が最高のパフォーマンスができるようサポートすること



小林 勇斗
1988 年生まれ。北海道札幌市出身。0 歳からベビースイミングを始め、幼少期から既にオリンピックを目指していた小林さん。大学卒業後は種目を個人メドレーとオープンウォータースイミングの二刀流＝《デュアルスイマー》に挑戦。オリンピックはオープンウォータースイミングに切り替え出場を狙った。しかし夢は叶わず 2013 年世界水泳を最後に引退。その時に出会った柔道整復師に感銘を受けその道に進むことを決める。その後 6 年間で柔道整復師、鍼灸師の国家資格を取得し 2022 年に地元札幌に「SŌMA 接骨院」を開業。

これまでのキャリア

●2001 年　全国大会出場 / 200m 個人メドレー北海道学童新記録樹立
●2003 年　JOC ジュニアオリンピック水泳競技大会 / 400m 個人メドレー優勝
　　全国中学校水泳競技大会 / 400m 個人メドレー準優勝
●2005 年　インターハイ / 400m 個人メドレー　第 3 位
●2006 年　国民体育大会 / 400m 個人メドレー 準優勝
●2008 年　ジャパンオープン/400m 個人メドレー第 3 位　　1500m 自由形第 3 位
●2009 年　インターカレッジ / 400m 個人メドレー準優勝

日本選手権 / 400m 個人メドレー第７位
●2012 年　ロンドンオリンピック世界最終予選　出場
●2013 年　世界選手権水泳競技大会 オープンウォータースイミング
・5km 53:48.0(+17.6) 25 位
・10km 1:50:17.4(+1:05.6) 26 位
●2013 年　水泳指導員資格取得
●2014 年　柔道整復師専門学校(夜間)入学
昼は水泳指導やデイサービスで勤務
●2017 年　柔道整復師国家資格取得
鍼灸師専門学校(夜間)入学 / 接骨院勤務
●2020 年　鍼灸師国家資格取得
●2022 年　札幌にて SŌMA 接骨院開業

■0 歳から水泳と出会う

母親に連れられて 0 歳の時からベビースイミングに通いだす。北海道で生まれたこともあり日常的にスキーをやりながら水泳の方を優先し取り組んでいた。すると水泳がメキメキと上達し、北海道で 200m 個人メドレーで学童新記録を出す。そして６年時には全国大会に出場。
練習環境は北海道の場合、学校に水泳部というものがなく学校外の水泳クラブで日々練習に励むことになる。中学生になると能力が一層開花し、400m 個人メドレーで全国準優勝という成績を残す。そしてジュニアオリンピックでは同競技で優勝を飾る。高校はスポーツ推薦で水泳環境の整った東京の日本大学豊山高等学校に入学。北海道を離れ寮生活をしながら日々練習。インターハイでは 400m 個人メドレー第３位、国民体育大会で２位という成績を残す。しかし、中々勝ちきれなかったことから指導者から自由形の長距離に転向を勧められるが、個人メドレーに強い思い入れがあり長距離には転向しなかった。
大学は日本大学に進む。インカレで 400m 個人メドレー２位… 4 年間インカレに出場したが、必ず決勝まで進むも優勝を飾ることはできなかった。
「思い入れのある種目で表彰台に立ちたい」という想いが強く、その後も同種目でオリンピック強化指定選手となり次のオリンピックを目指した。
大学卒業後はミキハウスに就職。ミキハウスは水泳に専念できる環境が整っていた。日本は世界的に見ても 400 メートル個人メドレーは強い。
オリンピックの出場枠は２枠。その後大活躍する、荻野選手や瀬戸選手がメキメキ力をつけてきた。



■2011 年に競泳とオープンウォータースイミングの二刀流

＝《デュアルスイマー》に

オープンウォータースイミングは、2008 年北京オリンピックより 10km の競技が正式競技となった。400m 個人メドレーに対する強い思い入れがあったが、やはりオリンピックに出たいというのが一番の目標で、後輩がメキメキ力をつけてきている個人メドレー競技より、もともと長距離が得意だった小林さんはオープンウォータースイミングでオリンピックを目指した方が近道だと考え、2011 年に競泳との二刀流（デュアルスイマー）で勝負することにする。
オープンウォータースイミングは長距離を泳げる泳力と駆け引きが重要な種目で、この種目のオリンピック出場枠は各国にあるわけではなく、オリンピック予選会（世界大会）の成績上位から選ばれる為、予選会（世界大会）で上位に進出する必要があった。
コースロープもなく全員が色んな駆け引きをしながらレースをする。マイペースで淡々と泳げばいいというものではない。世界各国から勝ち抜いた精鋭たちが出場。「単純に長距離を泳げればいいというものではない。レース経験も浅かったので駆け引きで負けた。進路妨害等でイエローカード 2 枚もらってしまい失格に終わってしまいました」と小林さん。ロンドンオリンピックに出場したら引退しようと考えていたが、予選会で敗れオリンピックには出場できなかった。流石にこれで引

退はできない。ここでやめたら絶対に後悔すると思い、もう一年続けることを決意。2013 年の世界水泳に標準を合わせた。



■人生に最大の影響を与えた柔道整復師の先生との出会い

その時に出会いがあった。柔道整復師の先生との出会いがもう一度世界を目指そうと思うきっかけとなった。　１年１年高い目標を掲げそれに向けて努力し、達成できなかったら引退すると決めていた。2013 年世界水泳 5 ㎞で優勝したのは前年ロンドンオリンピック 1500m 自由形優勝のウサマ・メルリ選手（チュニジア）。上位入賞者に実力者が入るかなりハイレベルなレースの中、小林さんはトップと 17 秒差の 53 分 48 秒で 25 位という結果。手ごたえを感じた瞬間であったと同時に、目標としていた結果を出せなかったことで一線を退く決意をする。「オリンピックに出場できなかったものの、2013 年の世界水泳でやり切った感もあった。一線を退くことに後悔はなかった」と小林さん。

ミキハウスに残る選択肢も頂いたが、出会った柔道整復師の先生の影響で引退後にそのような人になりたいと迷わずに決めた。先生のおかげで自身の身体も想像以上のコンディションになっていたし、自分もこれからの水泳界のために先生のような選手にとって影響力のある人間になりたいと思った。

医療資格なので３年間専門学校に通い、柔道整復師の国家資格をとった。

昼は仕事をしながら夜は学校に通うハードな日々が始まった。
柔道整復師の資格を持ってからは接骨院で働きながら、また夜に鍼灸の資格をとるために３年間専門学校に通う。結局６年間学校に通った。
「今後のためとはいえ、夜は学校で勉強、昼は普通に働いていました。正直かなりハードで必死の6年間でした」と小林さんは振り返る。

■念願の接骨院を開業

自身がオリンピックを目指し、ハードなトレーニングをこなし臨んだが結果予選で失格となった2012年。ボロボロになった身体を整えて頂いたのが柔道整復師の先生。その施術のおかげで蘇り2013年の世界水泳で自分自身納得できる結果を残せた。水泳選手と柔道整復師は無縁のようでそうではない。そう言える経験があるからこそ、この資格を取った。
2014年から3年で柔道整復師の国家資格を取得し、東京で5年間修業しながら鍼灸師の国家資格を取得。その後、2022年に念願の「SŌMA接骨院」を開業。他の接骨院とは違う方針を打ち出し、小林さんなりにしっかりと役割を考えてスタートした。
身体への負担や痛みが少ない施術。様々な施術を受けてきた中で小林さんが１番効果を実感できた施術方法を取り入れている。「私の役割は、痛みで競技を続けられなくなる選手をひとりでも少なくし、伸び悩む選手に対して手を差し伸べられる存在でありたい。私がそうしてもらったように、今度は自身が地元北海道でそうなりたいんです」と小林さんは力強く語る。
実は北海道で開業した理由がある。「北海道はある意味スキー王国でウインタースポーツが強いイメージがあるが、競泳でも日本代表として活躍している選手はたくさんいる。そういった選手が北海道からもっと将来生まれてほしい。そして私の役割は選手が最高のパフォーマンスができるようサポートすること。競技力が上がらないという悩みにも応え、これからもアスリート支援をずっとこの北海道でやっていく」と力強く小林さんは語ってくれた。



悩みや挫折を経験しながら大きくなった夢、そして実現。自分を育ててくれた水泳に恩返しを、そしてアーティスティックスイミングと男子選手の存在をより多くの人に知ってもらいたい。



安部 篤史

1982 年生まれ。東京都出身。3 歳から水泳を始める。中学までは競泳で数々の実績を残し高校は推薦で進む。しかしその後は中々結果が出ず高校三年生で競泳から引退を決意。その後大学に進み、映画「WATER BOYS」を観てシンクロの世界に感動し大学在学中に水中パフォーマンスチームに入団。その後ドラマ版の「WATER BOYS」に出演。そしてシンクロを競技として始めることを決意。2009 年、2011 年と FINA 非公式ではあったが世界大会へ出場。メンズカップで世界 2 連覇を果たす。2015 年の世界水泳ではシンクロナイズドスイミングの公式種目となったミックスデュエットに出場。2019 年の世界水泳ではテクニカル、フリー共に銅メダルを獲得。男子シンクロ選手史上初のメダリストとなり、その後引退。2019 年には、「シルク・ドゥ・ソレイユ」に入団。その後日本に帰国し、水泳・アーティスティックスイミングの指導者、競技解説、ショーやエキシビション出演、オンラインでの講義などアーティスティックスイミングの普及の活動に携わる。また日本水泳連盟 AS 委員会ナショナル強化部部会メンバーとして男子選手の普及と発展の活動にも携わる。

これまでのキャリア

●2001 年　帝京大学入学後、水中パフォーマンスチームに入団
●2003 年　テレビドラマ「ウォーターボーイズ」に出演
●2004 年　テレビドラマ「ウォーターボーイズ２」振り付け・指導補佐
●2009 年　メンズカップ(FINA 非公式世界大会)　優勝
●2011 年　メンズカップ(FINA 非公式世界大会)　優勝
●2015 年　FINA 世界水泳選手権(ロシア・カザン)　ミックスデュエット
　　テクニカル５位　　フリー７位
　　スペインオープン　ミックスデュエット　　フリー２位
●2016 年　FINA ワールドトロフィ　ミックスデュエット３位
●2017 年　FINA 世界水泳選手権(ハンガリー・ブダペスト)ミックスデュエット
あいうえおかテクニカル４位　フリー４位
　　FINA ワールドシリーズ　フレンチオープン
　　テクニカル２位　　フリー２位
　　ジャパンオープン　２位
　　スペインオープン　優勝
　　ウズベキスタンオープン　優勝
●2018 年　FINA ワールドシリーズ　フレンチオープン
　　テクニカル２位　　フリー３位
　　ジャパンオープン　　テクニカル２位　フリー２位
　　ギリシャオープン　　テクニカル２位　フリー３位
●2019 年　FINA 世界水泳選手権（韓国・光州）　ミックスデュエット
あいうえおかテクニカルフリーともに銅メダル獲得
　　FINA ワールドシリーズ　フレンチオープン
　　テクニカル優勝　　フリー優勝
　　ギリシャオープン　　テクニカル優勝　　フリー２位
　　ジャパンオープン　　テクニカル２位　　フリー３位
　　チャイナオープン　　テクニカル２位　　フリー３位
　　スーパーファイナルハンガリー　　テクニカル２位　　フリー３位
●2019 年　シルク・ドゥ・ソレイユに入団　「0」ショーに出演

■競泳選手だったけど、シンクロの道に

3 歳から地元の南光スイミングクラブに通い水泳を始める。順調に小学生で力を伸ばし、高校は特待生で埼玉栄高校に入学。ただ、全国大会予選となると色々なプレッシャーから結果を残せず、インターハイ出場も叶わなかった。そして競泳界から引退を決意する。
「特待生で色んな期待を背負い、プレッシャーに負け、全く結果を残すことができませんでしたが。もう水泳とは離れようと引退を決意しました」と安部さん。ちょうど 18 歳の時だった。その

後、帝京大学に進学したが水泳部に所属することなく普通の日々を過ごしていた。ところが幼少期から打ち込んだ競泳への時間を忘れることが出来ず、塩素の匂いに導かれるように水泳部に入部し新たな夢を探すことに。
「やはり自分は泳ぐことが大好きだ」と再認識していた時、映画「WATER BOYS」を観て男子シンクロの世界に魅了された安部さん。泳ぐことがこんなに団結力を高めるのか・・・と感動し、「自分もシンクロをやってみたい」と感じたという。
その後「WATER BOYS」を演出した会社が新人募集をしていることを知り応募。それが「トゥリトネス」だった。
2002 年迷わずオーディションを受け入団する。そして翌年のドラマ版「WATER BOYS」の出演が決まり、初めてウォーターボーイズというエンターテイメントとしてのシンクロの合宿を行う。全員が同じように泳げるのではなく、様々な人が同じ目標に向かって団結力を高めていく。これこそが安部さんがやりたかったこと。この経験がこの後の行動に生かされていく。
2003 年に出演した後、2004 年には「WATER BOYS２」で水中演技の振り付け、指導に携わる。

■自分の性格はショーでは通用しないと感じた日、

そして本格的にシンクロ競技の世界へ

「実は幼少期から人前が苦手で、メンバーとの練習の時でさえ下を向いてしまう。でも水の中では何でも出来てしまう。それが逆に個性がないと学ばされました」と安部さん。焦りや劣等感さえ覚えた。
そんな時、主宰の不破さんから「同期の誰よりも水中での才能がある。本格的にシンクロを練習してみないか。いつか男子シンクロの世界が切り開かれる日が来るかもしれない」というアドバイスがあり、そこから練習も人一倍力を入れて高度な技を身に付けていった。自分への自信の無さからステージでの披露などへは抵抗感があったが、技を身に付け少しずつ披露していくうちに仲間たちからも認められはじめ、ステージでソロ演技を披露することにも気持ちの違和感もなくなっていった。加えて、観に来てくださったお客さんから拍手喝采していただけることに喜びを覚えはじめた。
団結力というものを経験し、そして次の夢は男子シンクロ選手として競技会に出ること。そしていつか世界の大会のステージに立てるようになりたいと決意する。

■男子シンクロのパイオニアになる

アーティスティックスイミング（かつてのシンクロナイズドスイミング）は歴史を辿ると「スタントスイミング」と呼ばれ実は男子の競技だった。
今でさえ美しさや華麗さを求められる競技ではあるが、そこに力強さが加わることにより、今まで見たことのないような力強い演技を魅せられるのが男子の特徴。と言っても安部さんが始めた頃は、日本には競技としてやっている人はいなかった。世界大会はあるものの 2009 年に開催された「メンズカップ」はまだワールドアクアティクス(旧国際水泳連盟 FINA)非公認の大会であった。

世界大会で通用する選手になるためには、まだまだ高い水準で技を覚えていかないと駄目だと感じた安部さん。当時「トゥリトネス」に所属していた女性メンバーに指導をお願いした。そして 2009 年大会の「メンズカップ」という世界大会に出場し見事優勝。そして 2011 年の大会にも出場し優勝。大会二連覇を達成する。ただこの大会は日本水泳連盟からの派遣ではなくあくまで個人での参加だった。優勝しても話題には上がらない状況であり日々悩んだ。でもいつか「変化が起きてチャンスが来る」という信念のもと練習を続けていった。
そして 2014 年、嬉しいニュースが飛び込んできた。2015 年の世界水泳選手権にシンクロ男女混合デュエットが正式種目に決定した。そして選考会への参加を表明した。しかし大きな問題があった。今までの男子シンクロは、底に足が届く浅いプールでの演技が主であったが、公式の大会では水深の深いプールで演技をする必要があった。選考会まで３か月という短期間であったが多くの課題に立ち向かい続けた。
「自分が信じ続けてきたことを信じ切る」という強い気持ちで選考会を 1 位で通過する。そして女子で 1 位だった足立選手とペアを組むことが決定。



■念願の世界水泳に出場、そしてついにメダリストへ

2015 年の 7 月に開催された世界水泳はデュエットを組んで５ヶ月後の大会というタイトなスケジュールだった。休むことなく必死で練習する中、多くのメディア取材を受け戸惑うところもあったが、競技の普及に繋がる嬉しさも感じていた。でも時に自分が話した内容と違うものが報じられることもあり、それを跳ね返すくらいの練習と準備をしたかったが、中々気持ちを切り替えていくこ

とができず大会までの５ヶ月があっという間に過ぎ去っていた。
そして世界水泳本番、今まで経験したことのない緊張とプレッシャーで自分の本来の演技ができなかった。普段通りにやれば出来る演技もできず５位という結果に終わる。
しかし、男子シンクロとしての迫力ある演技は、女子だけでは表現できなかった演技や大技を繰り出し人々を感動の渦に巻き込んだ。そしてたくさんのメディアが取り上げてくれるようになった。
そうした功績が認められ 2016 年に株式会社よみうりランドの男子シンクロチームの指導振り付け補佐を務め、2017 年からは所属契約を締結する。その年の世界水泳は４位であと一歩メダルに届かなかったが、2019 年ついに夢が実現する。光州（韓国）で開催された水泳の世界選手権アーティスティックスイミング（AS）のミックスデュエット・テクニカルルーティン（TR）決勝で、足立選手とペアで見事に銅メダルを獲得する。フリールーティンでも銅メダルを獲得し 2 回も表彰台に立つことになった。
そして 9 月に引退を表明する。



■３つのうちの最後の夢、シルク・ドゥ・ソレイユ

１つめは「WATER BOYS」、２つめは「男子シンクロ選手」。そして 3 つ目の夢は「シルク・ドゥ・ソレイユ」出演だった。
2016 年、お世話になった「トゥリトネス」の退団という大きな決断をして一歩を踏み出した。自ら

シルク・トゥ・ソレイユにデモテープを送り高評価を得たものの、2016 年当時は出演ポジションがなく結果不合格。そして翌年の 2017 年は自身の修行の意味も込めて世界水泳に向けて気持ちをシフトチェンジしシンクロ選手に専念。そして 2019 年にシルク・ドゥ・ソレイユからポジションが空くかもしれないと連絡をもらい急いで新たなデモテープを送る。そして世界水泳でのメダル獲得と時を同じくしてシルク・ドゥ・ソレイユから正式に合格と「0」へのオファーの連絡をもらう。シンクロ競技引退後間もなくラスベガスに渡り現地でトレーニングを積み念願の「0」ショーに参加することとなる。ラスベガスでは１年間「0」というショーに出演。その後コロナ禍の影響でショーが一時クローズとなり帰国。その後はそのまま日本にとどまる事になったものの、大きな夢を実現できた達成感を感じた。

■夢は実現できると思っている

安部さんは誰もが認める男子シンクロのパイオニア。シンクロの世界に男子の存在感を示した。今や４歳からはじめている選手もいて後継者もいる。
2024 年のパリ五輪ではミックスデュエットの導入は見送られたもののチーム種目に男子が 2 名まで入れる新ルールが採用された事により、男子選手への五輪参加への門戸が開かれた。安部さんは「この先ミックスデュエットは間違いなく五輪種目に入ってくる。世界選手権で日本がメダルをとったという実績は後輩たちの今後に生かされると信じている。」
安部さんの夢はまだまだ続く。「男子アーティスティックスイミングをもっともっと広めたい」「水泳界に恩返しがしたい」。まだまだ浸透していない男子アーティスティックスイミングではあるが、今はアーティスティックスイミングの先生（コーチ）と、スイミングスクールのコーチ、そして呼ばれたらエキシビションやショーにも出演する。自分をここまで育ててくれた水泳を通して夢を見つける作業は続けている。日々の生活においてどんなチャンスがいつ舞い込んでくるかわからない。それは今の若い選手にも言い続けている。変化を信じ続けていけばいつか必ずチャンスが来る。そのチャンスを見逃さないためにアンテナを張りながら地道に準備をする。今もその信念のもと夢への探究と準備を進めている。



アスリートは永遠のヒーロー的存在に



志水 祐介

1988 年生まれ。熊本県熊本市出身。小学生から水泳とサッカーをはじめる。中学生の時に前十字靭帯を断裂し、サッカーを断念。膝に負担のかからない競技をやろうと思っていたところ、友人の勧めで水球を選択。「熊本ジュニア水球クラブ」で水球を始める。その後、水球推薦で埼玉県の埼玉栄高校に、そして筑波大学へ入学。大学卒業後、新潟県の実業団チーム「ブルボンウォーターポロクラブ柏崎」に入団。そして日本選手権優勝に貢献。大学時の 2008 年には日本代表としてワールドリーグアジアオセアニアラウンドに出場。その後も日本代表として活躍し、2016 年リオデジャネイロオリンピック、2021 年東京オリンピックに出場。リオデジャネイロオリンピックではキャプテンを務める。日本だけではなく海外のチームでも活躍。アジア人初の海外プロクラブチーム（ハンガリー）でキャプテンを務め、2022 年 3 月に現役を引退。その後 2022 年 10 月に一般社団法人アスヒロを設立。

これまでのキャリア

●2008 年　日本代表に選出　ワールドリーグアジアオセアニアラウンドに出場
●2012 年　「ブルボンウォーターポロクラブ柏崎」日本選手権水泳大会水球の部で優勝
●2016 年　リオデジャネイロオリンピック出場　キャプテンを務める
●2018 年　ブルボン KZ 日本選手権 2 回目の優勝
●2021 年　東京オリンピック出場

●2022 年　引退後　一般社団法人アスヒロを設立

■水球が本当に楽しかった

まだまだ競技人口が少ないイメージのある水球。しかしヨーロッパ諸国ではプロリーグが存在するほど競技人口も多くメジャーなスポーツ。日本では社会人リーグというものも存在しない。日本選手権でも全日体（Kingfisher74）が日本一の座に何度もついている。中学から水球を始めた志水さんは、特待生で埼玉栄高校へ進むも優勝を成し遂げることはできなかった。でも辞めようと思ったことはなく、大学もスポーツ推薦で筑波大学へ進む。”水球イコール日本体育大学”というのが王道のイメージで、その日本体育大学からも強いラブコールはあった。しかし志水さんは、日本体育大学の連勝記録を止めてみたいという想いと、中学と高校の教員免許をとるために筑波大学を選んだ。
水球を続けられるのも大学までという可能性もあったので、将来を見据えての選択だった。だが、日体大の牙城は崩せず大学４年間が終わる。
それでも厳しいトレーニングで培った個人レベルはさらに磨きがかかり、まだまだ水球を続けていきたいと思った。
水球というスポーツは、深いプールでずっと立ち泳ぎをし、水上でボールをまわしながらゴールを奪うスポーツ。ルールも厳しくゴールキーパー以外は両手を使えない。考えられないほどの持久力と筋力が必要。それでもずっと楽しかったと志水さん。

■社会人になっても水球と共に歩む

大学卒業後、2010 年に新潟県柏崎市で立ち上がったチームから強いオファーを受け入団。当時の日本代表や日本選手権出場者が集結した『ブルボンウォーターポロクラブ柏崎』である。
柏崎市は水球との歴史が長く環境も整っていた。選手は市内の協賛企業に勤務しながら競技に取り組む体制が整っていた。お菓子で有名なブルボンの本社は新潟県柏崎市にあり、株式会社ブルボンを中心に柏崎市や多くのスポンサー企業でチームが運営されている。そのため選手専任の契約はなく、選手でありながら運動トレーナーや中学教員と二足の草鞋で活動していた。
志水さんを筆頭に、ブルボンウォーターポロクラブ柏崎はチーム立ち上げから快進撃を続け、チーム発足一年目で日本選手権予選を圧倒的な力で勝ち抜き、本選初出場を果たした。その後志水さんは活躍の場を世界へと移す。世界から見ればまだまだ日本は強豪とは言えない。対等に戦うためには体力だけでなく技術も身に付けないといけない。夢を叶えるために安定の職（教員）を辞め、アルバイトをしながら、KFC BREAKERS（オーストラリア）、PALLANUOTO BRECIA（イタリア）、RACIONET HONVED（ハンガリー）などに渡りプロ契約を結ぶ。本場での戦い方や技術を学び帰国し、ついにその成果が発揮される時が来る。



■32 年ぶりのオリンピック出場。水球（ポセイドン・ジャパン）

水球のリオデジャネイロ・オリンピックアジア予選を兼ねたアジア選手権が中国・佛山で行われ、日本男子はライバルの中国に 16－10 で圧勝。そして 4 戦全勝で優勝し、1984 年のロサンゼルス大会以来 32 年ぶりにオリンピック出場権を獲得。サウスポーから繰り出す力強いシュートを武器に中心選手として活躍したのが志水さん。2016 年のリオデジャネイロオリンピックではキャプテンという重責を託された。結果は残念な結果に終わったが、オリンピアンとしての名誉を獲得した。
2017 年には試合中に左肩の筋肉を断裂する大怪我を負い手術をしたが、その後厳しいリハビリを積み重ね 2019 年の世界選手権では５得点をあげる。そして東京オリンピックにも代表選手として出場。オリンピック前の 2021 年 1 月から水球の強豪セルビアのクラブチームに期限付きで移籍し、東京オリンピックに向けて経験を積んだ。
そして 2022 年 3 月に現役を引退。すべてここまで自分のプラン通りに進んできた。決して楽ではなかったけど水球に打ち込み、オリンピアンとなり選手生活をしっかりと全うすることができた。

■「人徳」をしっかりもつこと

「人徳」をしっかりもつこと。選手生活を通して常に考えていた。
普通にできることをしっかりできる人が人徳を持っている人間になれる。
挨拶や礼儀、当たり前のことだが出来ない人も多い。人徳があれば運を惹きつける。志水さんはこ

の言葉を常に選手時代から思っていた。
だからこそ選手時代にセカンドキャリアも考えていた。
「選手時代は意外に時間はたっぷりある。時間がないからセカンドキャリアを考えることができなかったというのは言い訳だと。セカンドキャリアで悩む人は時間の使い方が甘いと思う」志水さんは強く言う。
セカンドキャリアを考える時間はいくらでもあった。社会人になってから常に考え、リオデジャネイロオリンピックに出場できた時も、その後のセカンドキャリアを構想していたし、色々と勉強して自分なりの計画を練っていた。
引退後、柏崎市の株式会社ブルボンに残るというオファーもあったが、2022 年 10 月に東京都武蔵野市に会社を立ち上げる。自身の経験から、スポーツの在り方を変えなければならないと思った。

■一般社団法人アスヒロを発足「身近なオリンピアン」

社団法人立ち上げた理由
「子供や地域の身近なオリンピアンとなり、スポーツによる体験を通じて子供に夢や希望を持ってもらい、地域を活性化する活動を行っていきたい。子供たちには身近なオリンピアンとの触れ合いを通じて、スポーツが持つ本来の楽しさを知ってもらうことで、将来の夢や希望をもってもらう活動を展開していきたい。そしてスポーツを通じて地域を盛り上げ、活性化する 『未来のブカツ』（経済産業省）の先駆けとして、子供や地域の人々、行政、企業を繋ぐモデルを構築していく。そして、アスヒロで構築したモデルを東京都武蔵野市から全国へ広げていきたい」と志水さんは語る。
水球だけではなく、今後は色んなスポーツ競技のアスリートと連携をはかっていきたいと。



■社団法人をもちながらも様々なところで活躍中

志水さんは現在、成蹊大学の水球部コーチ、そして全国の水球トップ選手の育成、お世話になった株式会社ブルボンとのアンバサダー契約、保育園のスポーツアドバイザー契約支援センターとの月一回の契約、熊本市親善大使と多忙な日々を過ごす中、スポーツの在り方を変えたい一心で取り組んでいる。
そして今でも企画書を作成して企業訪問し、企画提案を行っている。待っていても何もついてこないということは身をもってわかっている。
オリンピアンであっても受け身であってはいけない。
学ぶことはまだまだたくさんある。上手くいかないことが 1 番の材料。
自分の武器を活かす。自分の武器を頭で考え研ぎ澄ませる。
まだまだチャレンジが続けられる 34 歳。とにかく動く！！ということを常に考え前に前に進んでいる。



信頼できる人や支えてくれる人がいたからこそ セカンドキャリアは怖くなかった



大嶺祐太

元千葉ロッテマリーンズ
ドラフト1位
NPBプロ野球選手
株式会社OH 代表取締役

野球　yuta OMINE

大嶺 祐太
1988 年生まれ。沖縄県石垣市出身。野球をはじめたのは小学校 2 年生。沖縄県石垣市の「八島マリンズ」で三塁手として活躍。中学生時代は硬式ポニーリーグの「八重山ポニーズ」で投手として沖縄で開催された世界大会で 3 位の成績を収める。その後八重山商工高等学校に進学。高校 3 年時の 2006 年には春夏と甲子園連続出場。その年のドラフト会議で千葉ロッテマリーンズより 1 位指名を受ける。2007 年から 2022 年の 16 年間ピッチャーとして NPB で活躍。引退後、株式会社 OH の代表取締役として、飲食「ハーリー」でのオーナーを務めながらアパレルブランド「エルーシャ」を立ち上げる。数々の企業とのパートナー契約も結びながら、また野球スクール講師も務めながらさまざまな分野で活躍中。

これまでのキャリア

●2003 年　八重山ポニーズで世界大会 3 位に
●2004 年　沖縄県立八重山商工高等学校に入学
●2006 年　春夏連続で甲子園に出場
●2006 年　NPB ドラフトで千葉ロッテマリーンズから 1 位指名
●2007 年　千葉ロッテマリーンズへ入団

●2008 年　北海道日本ハムファイターズ戦でプロ初勝利
●2021 年　ロッテマリーンズから戦力外通告
　　あらためて中日ドラゴンズと育成契約に
●2022 年　16 年間のプロ生活に終止符を打つ
●2022 年　12 月に株式会社 OH の代表取締役に
●2023 年　アパレルブランド「エルーシャ」を設立
　　８月に料理店「創作ダイニング　ＨＡ－ＬＹ　爬竜船」をオープン

■野球を始めたきっかけは、遊びのキャッチボール

少年から大人まで草野球が盛んだった石垣島。野球との出会いは遊びで覚えたキャッチボールから。幼少期は年齢問わず誰とでも野球ができる環境が身近にあったため日常の遊びといえば野球だった。ただ、ちょうど 1990 年代後半 J リーグが全盛期ということもあり、野球だけではなくサッカーにも興味を持ち始めた時期だった。

実は大嶺さん自身サッカーの方が好きで、自らリフティングの練習をするほど夢中になっていた。しかし周りの人たちから「サッカーはルールが難しい」と言われ当時は子供心で素直に受け入れてしまった。「ルールがシンプルな野球の方がいいという軽い気持ちで始めました。でも実際、ルールは野球の方が難しかったです。」と話す。周りからのその言葉の裏には、大嶺さんの素質を見抜き期待の気持ちもあったのではないだろうか。
そして小学校 2 年時に「八島マリンズ」に入団。元々肩が強く、3 年生の頃から 6 年生に混ざって一軍 A チームで活躍した。ピッチャーは 5 年生から始める。学童野球は軟式だったが中学生に上がると硬式野球に転向し、硬式ポニーリーグの「八重山ポニーズ」で投手として活躍する。そして 2003 年、中学校 3 年生時にはポニーリーグ世界大会 3 位という素晴らしい成績を残すことができた。その年、日本がホスト国になり会場も沖縄開催という幸運にも恵まれる。「同県で４チーム選出される年だったので、とてもラッキーでした」と大嶺さん。

■プロ野球選手を意識しはじめた球速と甲子園

中学時にポニーリーグで世界大会優勝はしたものの、当時は離島出身の自分の実力が全国でどの程度なのかわからなかったために、プロに進もうということは考えてすらいなかった。肩は強かったが、体の線が細く高校入学当初は球速が 120km 程度。「九州遠征に行った先で、監督に『足を上げた時、そこで止めずに一連の動作で投げてみた方がいいんじゃないか』とワンポイント指導されました。実際にやってみると、なぜかみんなが空振りをしていったんですよね。」後に関係者から球速が 138km まで上がっていたと聞かされ、「自分でもびっくりしました」と大嶺さん自身が驚いたそうだ。その後も球速は伸び、1 年生で 143km を記録する。それでもプロへ進むという意識は全くなかったが、速球投手であるという確信を持てた。



©サンケイスポーツ

■プロ野球での活躍

高校での活躍が認められプロ野球から注目の的になると当然高校3年時のドラフトでは1位指名が確実視され、福岡ソフトバンクホークスの単独1位指名が予想されていた。高校時代に怪我をした時にも福岡ソフトバンクホークスだけが気にかけてくれていたということもあり気持ちも決まっていた。しかしドラフト会議当日、1位指名を公言していなかった千葉ロッテマリーンズから1位指名を受け抽選になった結果、千葉ロッテマリーンズが交渉権を獲得することとなる。この時大嶺さん自身が、“1年後の福岡ソフトバンクホークスからの指名を待つ”という決断をしたことで、当時のバレンタイン監督自身が石垣島に来島、直接交渉が行われた。その後時間はかかったが入団を決意。プロ野球選手となった。

プロ野球選手になり、春のキャンプから合流。球速も4月のファーム戦で150kmをマーク、速球投手として注目される。そして1年目の4月30日、埼玉西武ライオンズ戦でプロ初先発。勝敗こそつかなかったが、全国放送されたNHK総合テレビで、第1球にいきなり147kmを記録。その後も最速151kmを記録し、鮮烈な印象を残した。翌年2008年7月から先発ローテーションの一角を担うようになったが、なかなか勝ち星に恵まれない状態が続いた。そして7月24日、北海道日本ハムファイターズ戦でダルビッシュ有投手と投げ合い初勝利。大嶺さんは「プロ野球人生で一番記憶に残っている試合です」と当時を振り返った。

2009年5月13日の対ソフトバンク戦では6安打に抑えプロ初完封を果たす。その年は先発要員として５勝を挙げ、2015年は８勝を挙げた。その後2019年には全治12ヶ月の怪我でシーズン登板はなく、プロ野球人生後半は怪我との戦いもあり苦戦が続いた。

そして2022年、中日ドラゴンズに移籍したのち引退。プロ通算２９勝の記録を残した。

■自分が本当にやってみたいことをやるほうがいい

怪我が続き、プロ生活終盤は“セカンドキャリアを考えないといけない”と思い始めたという。「現役中は真剣に野球と向き合っていたものの、中日ドラゴンズに移籍した頃から『辞めるなら格好良くやめて好きなことをやりたい』と思い始めたのも事実。中途半端に野球を続けてもチームにも失礼だという気持ちもありました。」

戦力外通告を受けた時、2015年に結婚した奥様の存在は大きかった。覚悟を決めていたこともあり、「これからはやりたいことを妻と共にやっていこう」と前向きに受け入れることができた。引退後、奥様と起業した会社の代表権を譲り受け株式会社０Ｈの代表取締役として忙しい毎日を過ごすこととなった。野球から離れ、アスリートから経営者という立場になったことで、大嶺さん自身も変化を感じた。

―自分が本当にやってみたいことは何だろう。

飲食の道に進む人は多いが、それだけではなく、現役時代から感じていた食生活の重要さを広めたいと考えたのだ。「肩と肘の故障はあったものの、筋肉系の怪我が一度もなかったのは常に筋肉を強くする食生活をしていたから。食生活も広めながら飲食をやってみようと思うようになりました」と語る。

共同経営で始めた飲食業を2023年の9月に離れ、株式会社OHの飲食部門で東京・江東区内で料理店「創作ダイニング　ＨＡ－ＬＹ　爬竜船」をオープンする。「ＨＡ－ＬＹ」は沖縄各地の漁港で行われる競漕（きょうそう）とその祭りを表すハーリーから。店の自慢は、地元石垣島直送の石垣牛ハンバーグと石垣牛ステーキ、そして「勉強のため」と本場・名古屋で修行を積んだ手羽先。

大嶺さんは野球教室やイベント以外は常に厨房に立ちながら接客までこなし、お客様とコミュニケーションを図っている。またSNSで大嶺さんの出勤日も知ることができ、ファンにとっては考えられないような大サービスだ。

また、”やりたいこと”。これは以前から考えていたアパレルブランドの立ち上げ。「エルーシャ」というブランドを立ち上げネットで購入ができるようにした。ロゴマークも現役時代に手術した肘をキャラクターにしたユニークなものだ。



■ドラフト１位のプライドがようやく捨てられた

プロ野球に入団した時から、ドラフト１位という肩書きがありプライドを持たざる得ない日々だった。何かあると「ドラ１」と言われ常にプレッシャーと闘い、そのワードが邪魔をしていた。引退してようやくそのプライドが捨てられたという。プライドを捨てたことにより、野球界に残るという気持ちもすっきりとなくなった。「自分の好きなことをやろう、そして楽しもう。そう思う一方で、プロ野球選手だった頃には感じなかった、たくさんの人に支えられていたことを感じ、そういった方々に恩返しをしていこうという気持ちも芽生えました。」

食生活で学んだことを広めていこうと「子ども食堂」というイベントを沖縄で開催したり、今まで大嶺さんを応援し続けていた人たちやファンの方とも自身の店で気軽にコミュニケーションをとっていったり、野球界以外の方々に会う機会も増えた。やりたいことができる今の生活がとにかく楽しいのだという。

特に沖縄には思い入れがあり、身体能力が高い沖縄の子ども達に食生活のアドバイスをすることで怪我のない強い体になってもらいたいという思いも人一倍強い。「野球のプレーだけを教えるのではなく、体のケアまでトータルでアドバイスをしたいと思っています。今はまだ引退して１年経ったばかりでまだまだですが、将来必ず恩返ししたいです。」

プロ野球の世界は、引退後苦労しているひとを何人も見ている。そんなプロ野球選手にアドバイスするとしたら、「一度野球を離れて、自分のやりたいことを見つけとにかく動いて勉強して、やるべきだ。若いうちに積極的に外に出てチャレンジして欲しい。いろんな人に会ってヒントを見つけてほしい」と大嶺さん。引退してからいろんな人に支えられていたと改めて感じたという。



©サンケイスポーツ

アスリートの経験は社会に出てから絶対に役立つ。社会人にも伝授していきたい



足立 和弘
1977 年生まれ。京都府京都市出身。通っていた小学校の先生の勧めで「待鳳（たいほう）スポーツ少年団」に入りバレーボールを始める。地元の公立中学校から、京都の強豪校である洛南高等学校に進学。その後京都産業大学に進みエースアタッカーとして活躍。卒業後は NEC に入社し 8 年間 V プレミアリーグでプレー。天皇杯全日本バレーボール選手権大会で２回優勝。2007 年に選手引退。引退後は NEC にて社業に専念し現在も勤務中。

これまでのキャリア

●1993 年　京都洛南高等学校でインターハイ出場
●1995 年　京都産業大学でインカレ出場
●1999 年　日本電気株式会社(以下「NEC」)に入社。
　　バレーボールチーム NEC ブルーロケッツに入団
●2007 年　バレーボール選手引退。

■バレーボールとの出会い

バレーボールと出会ったのは小学校５年生の時。身長が高かったこともあり学校の先生に誘われたことがきっかけだった。小学校低学年の頃はサッカーをメインにやっていて、将来はサッカーをやり続けたいと真剣に考えていたが、中学校からはバレーボール一本に絞った。
中学校は地元の旭ヶ丘中学校に進む。バレーボールの強豪中学校ではあったが全国大会出場は叶わず、最高成績は近畿大会出場。それでも足立さんの活躍は注目され、多くの高校から誘いがあった中で京都の強豪校である洛南高等学校へ入学する。入学当時から身長 185 センチでエースとして活躍。その洛南高等学校には、中学校時代に全国優勝した有望選手が集まってきており常に優勝候補と言われていたが、３年間で全国優勝という目標を達成することはできず、春高バレーでベスト１６が最高成績だった。
当時の男子の有望選手は大学に進学してから企業チームに入る人が多く、足立さんも同様に大学への進学を志望していたため、地元の京都産業大学へ入学する。大学の４年間は関西１部リーグで活躍したが優勝には届かず、リーグ戦の最高成績は 3 位だった。ここでも足立さんのプレーヤーとしての評価は高く、いくつかの企業からオファーを受け、当時日本一を何度も経験していた関東の企業 NEC を選ぶ。入社前年も優勝している日本一のチームだったので決断に迷いはなかった。
2000 年、NEC に入社すると同時に NEC ブルーロケッツへ入団し、レフトのポジションで活躍した。バレーボールのトップリーグ（現在は V プレミアリーグ）チームへの入団は例年全国の大学から 10 名前後しか入団できない大変狭き門で、足立さんはその中の一人だった。NEC の場合、基本的に会社へは出社せず府中の体育館で終日練習を行うという毎日だった。「所属こそパートナービジネス本部であったが出社して業務を行うことはなく、バレーボールに専念できる恵まれた環境でした。」

ただ、優勝争いをするチームであるが故に毎年 2～3 人が戦力外となる大変厳しい環境であることを入団後に知ることとなった。チームの選手人数は 20 名前後、そこから試合のベンチに入れるのは 12 名ということもあり、先ずはベンチ入りを目標にしていたそうで、『今まで以上にポジション争い等で負けないように必死でした』と話す。



■不完全燃焼で引退、そして第二の人生を

足立さんがプレーしていた８年間は天皇杯全日本バレーボール選手権大会で２度優勝したが、V リーグで優勝することはできなかった。『V リーグのリーグ戦で優勝したかったと今でも思います』
入団当初のポジションはレフトプレーヤー（サイドから数多く打つポジション）として活躍をしていたが、現役時代の後半は怪我によりレシーブ専門のリベロとしてプレーしていた。しかし、現役時代終盤は会社の業績により、バレーボール採用も少なくなり戦力外となる選手も増えていた。自分自身の体力の衰えも感じ始めていた 2007 年、黒鷲旗（くろわしき）全日本男女選抜バレーボール大会を最後に戦力外通告を受ける。その翌年チームは廃部となった。
チームから戦力外通告を受けた後、NEC レッドロケッツ（女子バレーチーム）のコーチとしてのオファーを受けたが、一旦バレーボールから離れ社業に専念しようと決意。
NEC への入社はバレーボールが強いということだけで決めたが、選手引退後の優遇措置はなく、新卒社員と同じ立ち位置での業務スタートだった。新人研修と配属先の研修が１年間続く。その環境に馴染めず選手引退後に会社を辞める人も半数はいたという。一緒にスタートした新卒社員の中にはとても優秀な人材もいて、その中でどうやって自分をアピールしていくかなど悩んだり試行錯誤していた時期もあり、『実は配属１年目は何度も辞めようと思っていました』と当時を振り返る。
でもそんな時こそ『社業に専念すると決めた以上、どんな環境下であっても社会人としての基本と学ぶ姿勢を忘れない』と自分に言い聞かせ、周りに追いつくために沢山勉強して TOEIC を受けたりもした。誰とでも積極的に話せる明るいキャラクターを武器に先輩社員の方の営業に積極的に同行

して仕事を覚えていった。



■自分のアピールポイントはコミュニケーション力

1 年間の配属先の営業研修が終わる頃、『自分の強みはコミュニケーション力』と自信が持てるようになり、社内・社外問わず沢山の人と話す機会を作った。情報や知識も増えていき営業職としての成果も出て更に自信が付いた。また、実際の営業現場での商品開発において、自社製パーツを使用して取引先の要望に沿った機械装置を一緒に作っていく過程は楽しくやりがいを感じる業務でもあった。

NEC という企業は創業 120 年を超え、情報通信サービスの提供や情報通信機器の製造・販売を中心に行う IT 企業。例えば、携帯電話の基地局は日本の３社が行なっているがその中の一つが NEC である。選手を引退して一から仕事を学び、その過程で改めて気付く自社の魅力や業務の楽しさから、自然と仕事へのモチベーションも上がっていった。

■好きにやれ自分の思うままにやれ、何かあったら責任を取る

上司の魔法の言葉によってさらにやる気が出た。

お客様のニーズをしっかりと聞き、求めるものをゼロから作り出し提案していく。今は、NEC プラットホームズ株式会社のものづくり営業推進室　エキスパートとして活躍するなかで、ようやく会社の戦力になっていると実感してきている。またバレーボール女子チームのコーチも社業の一つとして関わり始めた。

NEC には昨年もリーグ優勝を果たした「NEC レッドロケッツ」という女子チームがあり、未来のアスリートを育てるための下部組織を持っている。GM をはじめ、元 NEC ブルーロケッツの選手で現役

社員の方がチーム運営を行っており、足立さんはアカデミーコーチも担当している。



■アスリートとしての経験を伝授していく

日本のバレーボールは企業がチームを運営し発展してきた。バレーボールのアスリートとして採用された選手は引退した後も所属企業で社業に専念できる環境があり、それは世界の選手から見ると大変恵まれている環境だという。しかし、社業に専念する時が来た時には一般入社の同年代と比較すると業務レベルではかなり遅れていることも事実。「最初は苦労することもあります。でもチームスポーツを経験している人は自然と周りとのコミュニケーションを取る力も身に付いているので、組織に溶け込みやすいハズ。積極的に自分から動いてみることを心がけて欲しいです。」

足立さん自身も、15 年勤めてきて組織で働くことにも自信がついた。「これからも一人で仕事をするのではなく、会社組織としっかりコミュニケーションを取りながらビジネスを進めていきたいと思っています。」

競技から離れた時こそ積極的になってほしい。そのキッカケや機会を作っていきたい



岡本 篤志

1981 年生まれ。三重県出身。小学校 3 年の時から野球をはじめる。中学校時代は学校の野球部に所属。高校は県内強豪校の海星高等学校に進学し、２年生の夏、エースとして甲子園に出場。翌年の春の選抜大会にも出場。その後明治大学に進学。東京六大学リーグ戦通算で 48 試合に登板し 12 勝という成績を残した。2003 年ドラフト会議で西武ライオンズ（当時）入団。1 年目の 2004 年に一軍公式戦 10 試合に登板するなど、主に中継ぎ投手として通算 13 年間活躍し 2016 年現役を引退。2018 年に株式会社Ｌ．Ｍ．Ｋを設立し、大学野球部の学生をメインに体育会系人材の就職支援、日本在住の外国人エンジニアの転職・就職支援事業を行っている。

これまでのキャリア

●1997 年　海星高等学校へ入学
●1998 年　第 80 回全国高等学校野球選手権大会に出場
●1999 年　第 71 回選抜高等学校野球大会に出場
●2000 年　明治大学へ入学
●2003 年　NPB プロ野球ドラフト会議で西武ライオンズ（当時）入団
●2016 年　通算 13 年間の現役生活を終え引退

●2018 年　株式会社Ｌ．Ｍ．Ｋ 設立

■甲子園に出場することだけ考えていた

中学校野球部の時に投手としてチームを県大会に出場させる活躍もあり、県外の高校からも勧誘があった中、『甲子園に出場することだけを考えていました』と県内の海星高等学校に進学する。自宅から通学するには少し距離もあり高校 3 年間は下宿生活を送っていた。県内屈指の強豪校で選手一人一人の向上意識も高く、全体練習終了後も自主練習に励むチームだった。

２年生の夏、エースとして甲子園に出場。翌年春の選抜大会にも出場し準々決勝まで勝ち進む。高校球児の誰もが憧れ目標とする甲子園出場を夏・春の 2 期連続で出場した。そして迎えた 3 年生最後の夏の県大会、決勝戦まで勝ち進み 3 期連続の甲子園出場目前だったが最終回に逆転されサヨナラ負け。『最終回はもう勝ったと思っていた・・・心にスキがありました』とマウンドに立っていた当時を振り返る。

高校野球の最後は悔しい思いをしたものの、甲子園での活躍もあり NPB 球団のスカウトを受けた。しかし当時はまだ自信もなく、大学野球を選択し明治大学に進学。岡本さんは『入学当初からプロ野球選手になるという思いがありました』と当時を振り返る。その言葉どおり東京六大学リーグ戦では通算 48 試合に登板し、12 勝という成績を残している。そして 2003 年、ドラフト会議で西武ライオンズ（当時）入団。1 年目の 2004 年に一軍公式戦 10 試合に登板、翌年の 2005 年には開幕 6 戦目に先発を任される。その後中継ぎ投手として通算 13 年間プロ野球選手として活躍した。



■怪我との戦い

2009 年に股関節を疲労骨折。スポーツの文献を調べてもらっても同じ個所を疲労骨折した前例がなく、手術してもしなくても全治が分からないという状況だったが、球団から『時間がかかってもいいからしっかり治してくれ』と言ってもらい、１年間治療とリハビリに専念した。
いつ痛みが無くなるのか、いつ投げられるようになるのかという気持ちの中、チームの成績も低迷し『自分がいればチームに貢献できたのに・・・』と精神的にもつらい時期だった。
翌年から復帰し順調に活躍していたが、2015 年の 34 歳の時に今度は肘の遊離軟骨を除去する手術をする。比較的難しい手術ではなかったので早期に復帰できると考えていたが予想以上に完治に時間がかかった。その後復帰して２軍で結果を残していたが中々１軍に呼ばれず歯がゆい思いも持っていた。若い投手が１軍に上がる時は頑張ってほしいと思う反面、悔しい気持ちもあった。だが、少しずつその気持ちも無くなってきていると感じた時、引退の決意をした。
「最初は鳴かず飛ばずで、プロ１年目から活躍できた訳ではないので 13 年間もプロの世界でやっていけるとは思っていませんでした。怪我などの痛みを抱えながらも２軍であっても最後までやり切ると決めてやっていたので、自分で引退すると決めた時はとても晴れやかな一方悔いしかないプロ野球人生でした。」



■引退後、球団に残る選択肢もあった中

「引退試合も準備していただき球団に残るお話しもいただいたのですが、元々現役時代に法人だけ

は持っていたのでそこで何かをやるっていうところだけ決めて覚悟を持って動き出しました。」
最初は何処かの企業に入り経験を積んで事業をスタートさせる選択肢もあった。ただ、当時35歳という年齢だったこともあり、知り合いの会社に入るくらいしか出来ないのでは・・・と考えた時に、2年3年で辞めるのは失礼になると思った。
元プロ野球選手という肩書もあり最初は色んなセミナーに呼ばれて講演する仕事も多かったが、立ち上げた会社の事業は人材紹介、外国籍人材の紹介事業。最初の成果はホテル業界に2名送り出せたことだった。「正直、プロ野球選手の時に得ていた収入・金銭感覚も残っていたので、事業として収益を上げることの難しさや、時間がかかるとも感じましたし、大変さの中で学ぶことも多かったですね。」

■チームスポーツを経験しているアスリートは社会人基礎力が身についていると思う

人材紹介・学生の就職支援の事業において、学生アスリートの方々と沢山お会いする機会がある。自分自身もそうだったように、アスリートたちは今まで出会った指導者やチームメイトとのコミュニケーション量も豊富で、かつ、チーム内の上下関係を通して自然と社会人基礎力が身に付いていると感じる。「無意識のうちに自然と身に付いている部分なので、そこを意識させることでより丁寧にできるようお話ししています。」
また、そのような人材は課題を提示してもしっかり準備してくるので、その対応力もしっかりと褒めて自信を付けてもらうことが大事だと考えている。学生アスリートに限らずスポーツアスリートたちは、競技を引退した後や引退を考え始めた時に結構消極的な姿勢になっている人も多い。「毎日毎日、同じルーティンを繰り返し、感情の起伏が有るなかでもずっとルーティンを繰り返す力。それができる選手が一流選手だと思うし、それを長く継続できていることも大変素晴らしいところだと思うんです。」そんな選手たちは本来精神的にも強いハズなのに、競技から離れるとなぜか消極的な姿勢になっていて非常にもったいないと感じている。

■アスリートとしての経験

一つの競技を長年やってきたアスリートとしての経験は一般の社会では中々経験できるものではないので、その経験に自信を持って次のキャリアに挑戦してほしい。
「体育会系の学生、特に大学野球部の就職支援をさせてもらっている中で感じるのは、インターンシップに行ける時間も少なく、企業が学生に何を求めているのかを知る機会も少ないということです。そこもしっかりと伝えてあげたいと考えています。」自身の経験や強みをしっかり考える機会を与えることで思考力も上がり、自身のキャリアにもつながっていきます。そしてその考えが今頑張っている競技にもしっかり活かされると思っている。

自分自身に自信が付けばポジティブに考え動けるようになっていく。特にアスリートたちはその能力に優れていると思う。キッカケを作ってあげることも自分の役割だと思っている。



スポーツを支える組織や仕組みを日々勉強することで、スポーツの素晴らしさを伝えていきたい



家高
七央子

元NECレッドロケッツ
バレーボールプレーヤー

NECスポーツビジネス統括部
パートナー営業

バレーボール　naoko YATAKA

家高 七央子

1991 年生まれ。長野県出身。幼少期からアルペンスキーに熱中していたが、家族や周りの勧めで中学校２年生の時に県内のバレーボール強豪校の裾花（スソバナ）中学校に転校しバレーボールをはじめる。高校は県内の東海大学付属第三高等学校（現、東海大学付属諏訪高等学校）に進学。その後東海大学に進学し、２年生だった 2011 年インカレ（全日本バレーボール大学男女選手権大会）で優勝。４年生の時は主将を務める。卒業後は NEC に入社し、女子バレーボールチームの NEC レッドロケッツで活躍。2018 年に選手引退。その後社業に専念し現在も勤務。

これまでのキャリア

●2011 年　東海大学２年生時、インカレ（全日本バレーボール大学男女選手権大会）優勝
●2013 年　第 27 回ユニバーシアードカザン大会　日本代表として出場
●2014 年　日本電気株式会社（以下「NEC」）に入社
　　女子バレーボールチーム NEC レッドロケッツに入団
●2015 年　第 28 回ユニバーシアード光州大会　日本代表主将として出場　銅メダル獲得
●2015 年　V プレミアリーグ優勝
●2016 年　AVC アジアクラブ選手権優勝

●2017 年　V プレミアリーグ優勝
●2018 年　バレーボール選手引退

■アルペンスキーで活躍

長野県木曽郡で生まれ、雪が多い土地柄幼少期からアルペンスキーに熱中していた家高さん。県大会でも上位に入賞するほどの実力で、その後も競技を続けていくつもりだった。
そんな中、中学校２年生の時に転機が訪れる。雪がない夏の時期、自身のトレーニングの一つとして姉がやっていたバレーボールの練習に参加していた。運動神経が良く身長が高かったこともありバレーボール強豪高校の監督の目に留まる。バレーボールへの競技の転向を勧められ、当時県内の強豪校だった裾花中学校に転校することを決意する。親元を離れ寮生活へと生活環境も大きく変わったが、バレーボール転向後直ぐに頭角を現し、中学校３年生の時に全国都道府県対抗バレーボール大会で主力選手として活躍した。
高校は県内の強豪校東海大学付属第三高等学校（現 東海大学付属諏訪高等学校）に推薦入学。１年生の時から春高バレーやインターハイに出場する活躍を見せた。高校卒業時には企業チームからの誘いもあったが、４年間しっかり身体を鍛えたいという想いや教員免許の取得を考え、東海大学に進学する。
大学２年生の時にインカレで優勝。そして 4 年生では主将を務め活躍する。大学時の活躍が認められ 2013 年には第 27 回ユニバーシアードカザン大会に日本代表として出場。2015 年の第 28 回ユニバーシアード光州大会では日本代表の主将として出場し、銅メダルを獲得。
大学卒業後は競技を離れ一般企業に就職することも考えたが、大学で一緒にプレーした先輩の姿を見て NEC で競技を続けることを決意した。



■NEC レッドロケッツを選んで

大学時代の友人や尊敬している先輩の存在もあり、NEC レッドロケッツでの選手生活はとても充実していた。
NEC レッドロケッツは 1978 年に日本電気グループを代表するスポーツチームとして発足。チーム発足同年、当時の下部リーグにあたる実業団リーグで優勝し、入れ替え戦で三洋電機に勝ち日本リーグに昇格。日本リーグでは 1988 年シーズンで初優勝。その後も 2023 年の優勝も含め 7 回の優勝を誇る。現在は V プレミアリーグという名称になっているが、日本リーグ時代から一度も降格したことがなく安定した強さを誇るチームである。
家高さんが入団した翌年、当時３連覇がかかっていた久光製薬スプリングスを下し、９年ぶり５回目の V リーグ優勝を果たした。2016 年には AVC アジアクラブ選手権に出場し初優勝を飾る。そして 2017 年にも V プレミアリーグで 2 年ぶりの優勝を飾るなど、選手として V プレミアリーグ２回の優勝を経験する。

翌年、チームは関東サッカーリーグ２部へ昇格を果たす。その時の浦本さんの活躍を見た他チームからオファーがあったが、地元大分で交通事故に遭い、サッカー選手を断念せざるを得ない状況となりプロサッカー選手のキャリアが終わることになった。
当時は、あと５年６年プロサッカー選手として活躍したい、そしてもっと上の舞台で戦いたいという想いを持っていたがその想いは打ち砕かれた。

ただ、簡単に諦めることはできず交通事故から回復後、暫くはアルバイトをしながら身体を動かし懸命にリハビリも行ったが、現役当時のレベルに戻すことは難しいと感じ、プロサッカー選手として復活することを諦めた。
「やれることは全てやったので後悔はありませんでした」
その後は地元の企業に就職し、会社員として 15 年間勤務する。



■社業に専念していく決心を

NEC に入社した当初から選手引退後は会社に残ると決めていた。引退した選手は事務職への配属が多い中、あえて営業職を希望し NEC ファシリティーズ株式会社に配属される。「難しい業務内容でしたが、業務の流れを理解したり専門用語などを沢山勉強したり、やりがいを感じる仕事でした。上司にも恵まれて楽しく仕事に取り組めていましたし、配属されてからの３年間はとても充実した日々でした。」

そして２回目の転機が訪れる。2021 年 4 月、 NEC が所有するスポーツチームであるレッドロケッツとグリーンロケッツ東葛（ラグビーチーム）のスポーツビジネス事業の拡大を目指しスポーツビジネス準備室が発足され、１年後の 2022 年 4 月「スポーツビジネス統括部」が新設された。営業職でかつアスリート経験者である家高さんにも当然声がかかり、「スポーツビジネス統括部」への異動が決まる。
現在 NEC では、女子バレーボールの他にプロ化が進みつつあるラグビーのチームがある。今までの

企業スポーツは企業が 100%バックアップをする運営手法であったが、近年スポーツ界ではプロ化が進んでおり NEC の企業スポーツも時代の流れと共に法人化、ビジネス化に向けて B リーグ（バスケットボール）のチーム発足者を招き入れ、スタートしている。「スポーツビジネス統括部」はその中心的な役割を担い、家高さんはレッドロケッツとグリーンロケッツ東葛のスポンサー営業を担当している。現在１２０社ほどの企業からスポンサードを受け NEC ロケッツが運営されている。
「チーム運営の業務を行うようになって、３年間の営業経験が活かされる場でもある反面、バックオフィス業務などを見ると、自分も選手時代は現場に支えられていたんだなと改めて認識し、スポーツを支える組織や仕組みというものを日々勉強しています。今、仕事がとても楽しいです。」
また、家高さんは日頃の業務の傍ら、未来のアスリートを育てる下部組織のレッドロケッツアカデミーのコーチとしても活躍している。



■川崎市から発信していく

川崎市はスポーツの街。NEC レッドロケッツは 2005 年６月に横浜市都筑区の横浜事業所から川崎市中原区の玉川事業所に移ったタイミングで川崎市ホームタウンスポーツ推進パートナーに認定されチームとして地域への活動も行っている。サッカーの川崎フロンターレ、バスケットボールの川崎ブレイブサンダース、アメフトの富士通フロンティアーズ、女子バスケットボールの富士通レッドウェーブ、野球の東芝ブレイブアレウス、そして NEC レッドロケッツがあり、いずれのチームもホームタウンスポーツの推進パートナーとして地方自治体と一体になり「スポーツとまちづくり」を推進すべく盛り上げている。

バレーボールは1964年の東京オリンピックでの女子金メダル、1972年のミュンヘンオリンピックでの男子金メダルを皮切りに幅広い年代から愛され、企業スポーツとしても長年支持され成長してきた。そのバレーボールも一部プロ化が進み、プロ化が進めば当然コストもかかり企業スポーツとしての運営は難しくなっていく。これからの時代の流れに合わせた「独立したチーム運営の構築」を進め、引き続き地域の活性化に繋がる地方自治体のパートナーチームの一員として、今後も家高さんの活躍が益々期待される。

SPORT CAREER SUPPORT CONSORTIUM
スポーツキャリアサポートコンソーシアム

スポーツで夢を繋ぐ。 子ども達が心からスポーツを楽しめる環境を行政と協力し、地域を盛り上げたい



浦本雅志

元Jリーガー
FCジュニオール 代表
株式会社FGR 代表取締役
一般社団法人 夢プロジェクト
代表理事

サッカー　masashi URAMOTO

浦本 雅志

1981 年生まれ。大分県中津市出身。サッカーを始めたのは小学校 3 年生。小学校と中学校では県選抜に選ばれる。高校は地元の大分高校に進学。全国高校サッカー選手権大会、国体、インターハイと高校サッカー全国大会全て出場しチームの中心選手として活躍した。高校卒業後、当時 J1 リーグのアビスパ福岡に入団。 2 年間の在籍後、当時県リーグ 1 部のザスパ草津（2024 年よりザスパ群馬）に移籍。移籍初年度にチームの関東サッカーリーグ 2 部昇格に貢献するが、その翌年のシーズン前に交通事故に遭い選手生命を絶たれる。その後プロサッカー選手を断念して一般企業に就職した。15 年間会社員として勤務し、2017 年にサッカークラブ FC ジュニオールを設立。未来に向けた子供のスポーツ育成に力を入れる中で、一般社団法人夢プロジェクトも立ち上げ、プロサッカー選手を招いて様々なイベントを開催している。

これまでのキャリア

●1997 年　大分高校で全国高校サッカー選手権大会、国体、インターハイ出場
●2000 年　アビスパ福岡に入団
●2002 年　ザスパ草津（当時）に入団
●2004 年　プロサッカー選手を引退

●2004 年　　一般企業に就職
●2017 年　　FC ジュニオールを設立
●2019 年　　株式会社 FGR（フットボールグラスルーツ）設立
●2023 年　　一般社団法人 夢プロジェクトを立ち上げる

■サッカーとの出会い

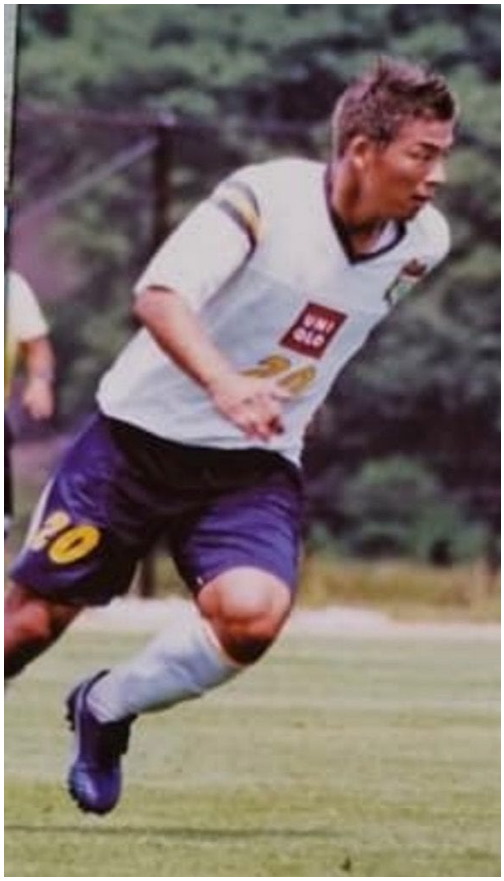
サッカーを始めたのは小学校３年生から。当時はまだＪリーグが始まる前で元々は野球好きだったが、一つ年下の弟がサッカーに夢中で凄く楽しそうにしている姿を見て、自身もクラブチームの体験練習に参加してみた。「その体験練習がとても楽しくて、そこから本格的にサッカーを始めることになりました」

クラブチームは市の大会ではトップレベルだったが、県大会では結果を残せなかった。しかし、試合での活躍が認められ大分県の選抜チームに選ばれるようになる。一方、弟は既に九州選抜に選ばれていて、その頃から良きライバルだった。小学校 6 年生の時にＪリーグがスタートしたこともあり、必然とＪリーガーになる夢を追いかけるようになった。
中学校は地元の豊陽中学校に進みサッカー部に入る。1994 年のサッカーワールドカップアメリカ大会が開催されたこともありサッカーの人気が一気に高まっていた頃。サッカー部での練習はとてもハードだったが技術的にも精神的にも成長し、中学校でも県の選抜チームに選ばれる選手になっていた。

■高校からはＪリーガーを夢見て

高校は九州他県の強豪校に行きたいと思っていたが、地元の大分高校の練習に参加した時に「技術的な指導がとてもわかりやすい」と感じサッカー部の特待生として入学すること決めた。当時の大分高校サッカー部は、指導している顧問の先生が３年目に入る頃で、全国大会に出場する強豪校となっていた。その中で浦本さんは１年生の時からサッカーのエースナンバーである背番号 10 番を背負い、夏のインターハイは 2 回出場しいずれもベスト８、冬の全国高校サッカー選手権大会は 2 年生時に出場、国体は 3 年連続出場した。
１年生の時から複数のプロチームのスカウトから話を聞く機会があり、そこからプロサッカー選手になることを意識し始める。実際、当時 J1 リーグだったアビスパ福岡からスカウトを受け、高校３年生の夏にチーム練習に参加し入団が内定した。
高校卒業後、晴れてプロサッカー選手となり、日本のサッカー最高峰の舞台である J1 リーグでプレーすることになる。
Ｊリーグのチームには１チーム 50 名程の選手が在籍し、トップチーム、セカンドチームに振り分けられる。プロ野球でいう１軍、２軍である。浦本さんは１年目にトップチームに入るものの中々試合に出場することが出来なかった。
「試合に出場できないことから焦りが出て、自分のミスを他人のせいにしていました。まだまだマインド的にも未熟でした。」

入団２年目にチームはJ2リーグに降格となり、そのタイミングで戦力外通告を受けた。当時はまだ20歳で、まだまだこれからの時期だがプロの世界の厳しい部分を経験する。
その後、複数チームのオファーの中から、当時県リーグ１部に所属していたザスパ草津に入団する。これから選手を集めて一からチームを強くしていく段階だったが、選手としてとてもやりがいを感じる部分でもあった。



翌年、チームは関東サッカーリーグ２部へ昇格を果たす。その時の浦本さんの活躍を見た他チームからオファーがあったが、地元大分で交通事故に遭い、サッカー選手を断念せざるを得ない状況となりプロサッカー選手のキャリアが終わることになった。
当時は、あと５年６年プロサッカー選手として活躍したい、そしてもっと上の舞台で戦いたいという想いを持っていたがその想いは打ち砕かれた。
ただ、簡単に諦めることはできず交通事故から回復後、暫くはアルバイトをしながら身体を動かし懸命にリハビリも行ったが、現役当時のレベルに戻すことは難しいと感じ、プロサッカー選手として復活することを諦めた。
「やれることは全てやったので後悔はありませんでした」
その後は地元の企業に就職し、会社員として15年間勤務する。

■プロ育成者への道

会社員として勤務する傍ら、大分県リーグに所属しているクラブチームの一員としてサッカーは続

けた。そこでは国体にも出場し、社会人の成年（なるねん）で複数回出場した。「アマチュアとしての出場ではありましたが、サッカーがとても楽しかったです」
子供が小学校に上がる時にサッカーをやりたいと言い始め、それがキッカケでサッカーの指導者の道に進むことになる。2016 年の 35 歳の時、小学校 4 年生から 6 年生を対象としたサッカースクールを立ち上げた。
子供たちはそのスクールで技術を磨いていたが、子供たちがチームに戻ると監督やコーチにその技術を否定され、本来のパフォーマンスを発揮できないという現実に直面する。「スクールで磨いた技術をチームに戻ってチャレンジもさせてもらえないのならスクールで教える意味が無くなってしまう。だったら自分でサッカーチームを持てばいい」と思い、2017 年にジュニアサッカークラブ FC ジュニオールを立ち上げた。
「教えた技術を試合で発揮させたい」という思いからスタートしたチームだった。スタートした当初は子供たち 20 名程だったが、今では中学生も所属しており、幼児向けのキッズスクールも運営し始め、現在はチーム、スクール合わせて 100 名以上の子供たちが所属している。



昨今、小学校では積極的にスポーツをさせていこうという動きが弱く、中学校の部活動も活動内容が変わってきており、スポーツをさせると怪我をする危険があるというネガティブな部分が大きくなっている。「それではスポーツによって鍛えられる身体の反応や危機管理能力が減っていく一方」と浦本さんは言う。

「普通のスクールでは面白くない、地方自治体と組んで子供たちが楽しくサッカーと触れ合える機会を創っていこう」と動き始めた。



■大分県の子供たちと一緒にスポーツを盛り上げたい

「スポーツをする子供が減っている、スポーツをする子供を増やしていきたい。」
その一心で元プロサッカー選手として何かできないかを考えるようになり、仲間と一緒に一般社団法人『夢プロジェクト』を立ち上げ、目的に賛同してくれた他競技のアスリートも集まった。
中学校では部活動廃止の動きがあったり、スポーツをやりたくてもできない子供たちが多くなってきている。スポーツを止めない、そしてスポーツをする場所を無くさないようにと地方自治体と共に取り組んでいる。
「子供たちの未来と地域活性、そこにアスリートのセカンドキャリアを融合させ、サッカーチームの活動を通じて子供たちが笑顔になり、真剣にサッカーに向き合える機会を創りたい」
その想いから、2017 年にサッカー元日本代表の前園氏を招いてサッカー教室を開催し、子供たちがプロサッカー選手と触れ合うイベントとして４年続けて計６回開催している。
また、その活動で得た知見をもとにバレーボールやラグビーなど他競技を交えた、夢を叶える『OITA 夢プロジェクト』を開催した。このプロジェクトには地元のサッカーチーム『大分トリニータ』『ヴェルスパ大分』にも協力してもらっている。また、U-10 年代向けに ”子どもの自主性、創造性、可能性をのばす” 意図を持つ『ノー・アングリー、フリー・プレー カップ』も開催。

「これらのイベントを通して、子供たちを指導する方々にも何か新しいものを感じとって頂ければと願いながら、これからも大分を起点に全国に発信していきたいです」


株式会社 エイト
サンエイデンタル
FBSL

時間の量は変えられなくても質は変えられる　限られた時間をいかに過ごすのかが大事



大村 加奈子

1976 年生まれ。京都府京都市出身。中学校 1 年生からバレーボールを始める。京都府立北嵯峨（きたさが）高等学校では春高バレーでベスト 4 に進出。全日本ジュニアのメンバーに選出されアジアジュニア選手権で準優勝を経験。高校卒業後、ダイエーオレンジアタッカーズ（当時）に入団。1997 年に全日本メンバーに初選出されワールドグランプリ大会に出場し、2004 年のアテネオリンピックにも出場した。2007 年久光製薬スプリングスで V プレミアリーグ優勝。同シーズンの日韓トップマッチ、第 56 回黒鷲旗（くろわしき）大会も優勝し三冠を達成する。その後も全日本メンバーとしてワールドカップ、2008 年北京オリンピックにも出場した。2009 年 9 月、京都府教育委員会の教員採用試験を受験し、特別免許状により 2010 年 4 月から母校である京都府立北嵯峨高等学校に教員として着任することが決まり、2010 年 3 月に現役を引退する。

これまでのキャリア

●1994 年　春の高校バレーでベスト 4
　　全日本ジュニアに選出されアジアジュニア選手権準優勝
●1995 年　ダイエーオレンジアタッカーズに入団
●1997 年　全日本メンバーに選出　ワールドカップに出場

●2004 年　アテネオリンピックに出場
●2007 年　久光製薬スプリングスで V プレミアリーグ優勝
●2008 年　V プレミアリーグ 230 試合に出場し特別表彰受賞
　　北京オリンピックに出場
●2010 年　バレーボール選手引退
●2010 年　京都府立北嵯峨高等学校に教員として着任

■先生から勧められたバレーボール

本格的にスポーツに挑戦しようと思ったのは中学生になってからだった。中学校入学時、身長が 180 センチほどあり、最初はバスケットボールをやりたいと思っていたが通っていた中学校にバスケットボール部がなく、姉が所属していたバレーボール部に入る。身長が高かったこともあり、当時から JOC（日本オリンピック委員会）の全日本ジュニア最終選考会に選ばれるが、まだ技術面に課題があるという理由で選出されなかった。
高校の進路相談の時点ではまだバスケットボールへの想いがあり、バスケットボールの強豪校に行きたいと先生に相談したが、「性格的にネットを挟んだバレーボールの方が向いている」というアドバイスを受け、バレーボールで進学することを決意する。
私立の強豪校がひしめく京都府の中で公立の北嵯峨高校に進学し、３年生の時に全国春高バレーボール大会に出場。同校初のベスト４進出に貢献。練習は厳しかったが課題だった技術面も成長し、全日本ジュニアのメンバーに選出され、1994 年アジアジュニア選手権で準優勝の結果を残した。
高校卒業後の進路は、当初大学進学を希望していた。「将来は警察官か教員になりたいと思っていたので大学進学を希望していました。」
しかし、それまでの活躍もあり、当時の強豪企業チームだったダイエーオレンジアタッカーズからオファーを受け、バレーボール選手を続ける決断をする。入団から 2 年後の 1997 年に全日本代表メンバーに初選出され、ワールドグランプリで国際大会に初出場。センターもレフトもこなせる身体能力の高さ、持ち前の跳躍力で活躍するも、膝への負担から右膝の手術を２度行っていた。そんな状況もあり、2003 年５月のバレーボール黒鷲旗大会終了後、一度は引退を決意した。
「大きな怪我をしたこともありましたが、高校生の時から警察官か教員になりたいという想いをずっと持ち続けていました。警察官は年齢制限が 30 歳だったので当時 27 歳の時に、今しかない・・・と警察官になるために勉強しようと思いました。」



■引退を決意してからのオリンピック出場

引退して警察官になるために勉強をしようと思っていた矢先、2003 年 3 月に発足した『柳本ジャパン』の柳本監督から直接全日本チームの合宿参加要請を受ける。「とりあえず騙されたと思って合宿に来てほしい」と言われ、軽い気持ちで合宿に参加したが、そこには翌年のアテネオリンピック出場を目指し蒼々たるメンバーが選出されていた。「最初は、どうせ辞めるのにどうしてこんな合宿に参加しないといけないのか・・・という気持ちだったのですが、徐々にこのメンバーと一緒に頑張りたい、やらなきゃいけないという気持ちに変わっていきました。目的意識が高いチームにいることで自然と自分の意識も変わり、このメンバーでオリンピックに出たいと強く思っていました」と当時を振り返る。

そして翌年の 2004 年アテネオリンピックに見事出場する。

「色々あったけど沢山の学びもあり、バレーボールを続けて良かったと感じました。オリンピックにも出場することができて、しっかりやり切ったという気持ちもあり、翌年の 2005 年に引退することを決めていました。」

しかし、再び転機が訪れる。久光製薬スプリングスの新監督として眞鍋政義氏が就任。「全日本のセッターとして活躍され憧れの選手だったので、このチームでプレーしたい、もう 1 年選手として頑張ろうという気持ちになりました。」　そして 2007 年に再び全日本チームのメンバーに選出される。

2008 年 4 月、V プレミアリーグ出場 230 試合となり『V プレミアリーグ特別表彰制度』の基準を満

たし長期活躍選手として特別表彰された。同年５月には北京オリンピック最終予選で勝利し、２大会連続のオリンピック出場を果たした。
「何度も引退を考えましたが周りのメンバーにも恵まれ、長年に渡り選手としてプレーすることができました。」
全日本チームで得たものは、とにかく実力の世界ではあるが、チームの根になり必要な存在になれるよう何事も率先してやること。それを心がけるようになったという。

■なりたかった職業に就くことに

トップアスリートでオリンピアンでもある大村さんは、高校時代から将来のことを考え、警察官か教員を目指し大学進学を考えていた。しかし、全日本ジュニアに選出されて以降、バレーボール選手としてもっと力を試してみたいという気持ちを抱き、大学進学を諦めていた。
北京オリンピックが終わり改めて引退を考えていた頃、出身地の京都府教育委員会の教員採用試験にスペシャリスト特別選考があることを知り受験する。特別免許状という特別選考枠で教員採用が内定した。「全国の中でも京都府が率先して進めていた制度だったので、運もありタイミングがとても良かったです。」
2010 年３月に久光製薬スプリングスを退団し、４月から母校である京都府立北嵯峨高校に教員として着任したが最初は苦労したという。「元アスリート、元オリンピック選手という特別扱いは勿論なく、むしろ本当に教員ができるのかという目で見られているかもしれないと思っていました。
日々勉強しながら自分の出来ることからしっかりやろうと思っていました。」
それは、当たり前のことに気付き感謝する気持ち、周りの仲間の存在、自分自身に言い訳しない、自分の可能性を狭めない・・・。バレーボールという競技に一生懸命向き合い、オリンピックに出場した中で大村さんが学んだことだった。それを生徒たちに伝えていくこと。



現在は、女子バレーボール部の監督を務め、京都の代表校として春の全国高校バレーボール大会にも出場している。

■夢を持ってもらいたい

「生徒たちは自分の鏡だと思って接しています。生徒たちに元気がないと感じた時は、自分が映し出されていると思って誰よりも元気を出すようにしています。授業に集中できていない生徒がいたら「つまらない授業をしてごめんね」と思うし、常に自分から明るい態度で接するよう心がけています。」
そして必ず生徒たちに伝えている言葉がある。『目標を持とう』
「なりたい自分を思い描くことができるのは人間特有のものなので、なんでも失敗を恐れず挑戦してもらいたいと自分の経験を踏まえて伝えています。」
また、気を付けていることもある。生徒たちへのアドバイスを少しでも間違えると違う方向に向いてしまう可能性もある。「軽く言葉を発してはいけないと教員になって改めて感じている。自分が中学生の時に自分の性格をしっかりと見て進路のアドバイスをしてくれた先生の言葉を良く思い出します。」

■指導者として伝えたいこと

「可能性というのは未知数でもっと広がるものなのに、人はすぐに「無理」とか「できない」とか自分自身の可能性を狭めていると思う。実は自分もそうだったと振り返ることも沢山あるけど、「先生、できません」というシーンがとても多いと感じています。」その度に「無理」とか「できない」というネガティブな発言をさせないようにしている。「そうしないとすぐに諦める人に育ってしまう。自分も「無理」「できない」と言うことはやめようと肝に銘じています。」
今のバレーボール部の選手たち皆がトップアスリートになるわけでもないし、色々な考えを持って時間を過ごしている。だからこそバレーボールを通して人間力を高めて欲しい。「時間の量は変えられなくても質は変えられるという教えも同じこと。人間は 100%の力をなかなか出せないもの。その力を自分の限界に近づけるのが指導者の役割だと思っています。」
目的意識を持たない、ただやっただけの練習を続けていては伸びるものも伸びない。「時間の使い方の質を変え、その限られた時間をいかに過ごすかが大事。」自分自身もバレーボールを通して、多くのことを学んだ。それをしっかりと指導者として伝えていきたい。



最初は何もできないのは皆一緒、自信を持ってセカンドキャリアに踏み出してほしい



吉田 裕太

1991 年生まれ。千葉県流山市出身。小学校３年生から野球を始める。小学校時代に硬式野球ボーイズリーグで全国優勝を経験する。中学校でも硬式野球を続け、高校は東京の日本大学第三高等学校へ進学。３年時には主将を務め夏の甲子園に出場する。卒業後は東都大学リーグの立正大学へ進学。２年時には日本代表メンバーに選出され日米大学選手権大会に出場。大学４年時の NPB プロ野球ドラフト会議で千葉ロッテマリーンズから指名を受け入団。９年間プロ野球選手として活躍後、2022 年に戦力外通告を受け現役を引退。現在は埼玉県にある輸入車専門店「ボンドカーズ」に勤務。

これまでのキャリア

●2008 年　第 91 回夏の全国高等学校野球選手権大会に出場
●2011 年　日米大学野球選手権大会の日本代表メンバーに選出され出場
●2012 年　東日本大震災復興支援ベースボールマッチで大学選抜メンバーに選出され出場
●2014 年　NPB プロ野球ドラフト会議で千葉ロッテマリーンズから指名を受け入団
●2022 年　９年間の現役生活を終え引退
●2023 年　株式会社ホソカワコーポレーションに入社

■ポジションはキャッチャー一筋

小学校 3 年生から野球を始め、硬式野球ボーイズリーグの「流山クラブ」に入団し、ボーイズリーグ全国大会で優勝経験を持つ。身体が大きかったこともあり、野球を始めた当初からポジションはキャッチャーだった。中学校の時は同じく硬式野球の「柏リトルシニア」でプレー。全国大会出場を目指していたが出場は叶わなかった。
高校は監督の勧めもあり日本大学第三高等学校へ進学。全国から有望な選手が集まる強豪校で２年生の夏の大会までベンチ入りメンバーに入ることは出来なかったが、日々の努力や野球に対する姿勢から新チームの主将に抜擢される。高校野球最後の夏の西東京大会で見事優勝し、第 91 回全国高等学校野球選手権大会に出場。目標だった甲子園出場を果たす。

小さい頃からプロ野球選手に憧れていたが、今の実力ではプロ野球の世界に入るのはまだまだ厳しいと思い、当時東都大学リーグ１部に所属していた立正大学へ進学する。
１年生から試合に出場し、秋からはレギュラーで起用されるようになった。その活躍が評価され２年生の春季リーグ戦終了後、第 38 回日米大学野球選手権大会の日本代表メンバーに選出される。その後も期待通りの活躍で２年生の秋にはリーグ首位打者を獲得した。
日本代表メンバーで共に戦い、同じ東都大学リーグで活躍していた選手がプロ野球に進むのを見て、その頃に初めて「自分もプロ野球の世界で戦えるかもしれない」と思うようになったという。
３年時にも東日本大震災復興支援ベースボールマッチの大学選抜メンバーに選出され、４年時には野球部の主将としてリーダーシップを発揮する。その年、同大学 OB で社会人野球でもキャッチャーとして活躍した坂田氏が監督に就任。キャッチャーのノウハウを徹底的に叩き込まれ更に成長していく。そして 2013 年の NPB プロ野球ドラフト会議で千葉ロッテマリーンズから指名を受け入団する。

■厳しかったプロの時代

入団１年目の 2014 年、開幕一軍メンバーでスタートする。3 月 29 日の開幕２戦目から先発キャッチャーで出場。このシーズンはキャッチャーとしてチーム最多の 50 試合に出場し、プロ野球選手として良いスタートが切れた。
しかし、それ以降は相次ぐ故障により離脱と復帰を繰り返すことになる。2021 年は公式戦で本塁打を放つ活躍を見せるも、左手関節手術を行ったこともあり７試合の出場にとどまる。その後、2022 年のシーズン終了後、戦力外通告を受けた。
入団当初から攻守にバランスの取れた大型捕手として期待されていたが、「怪我も多く思うようなプレーが出来ませんでした」と振り返る。



■NPB だけで続けたかった

戦力外通告を受けたがまだまだやれる自信があり、他球団からのオファーを待った。独立リーグや社会人野球からのオファーはあったが NPB プロ野球球団からのオファーは無かった。「独立リーグや社会人野球からのオファーは大変有難いことでしたが、NPB プロ野球でプレーすることしか考えていませんでした。」
千葉ロッテマリーンズ球団にスタッフとして残るオファーも受けたが、野球から離れた道を考えるようになる。「プロ野球選手となって毎日必死にやっていた自負もあり、後悔なども全く無くやり切った気持ちでした。」
野球から離れた道、「家庭を守るためにどんな仕事でも稼げればいい」と考えていたが、大学の恩師に相談した時に「好きなことをやらないと長く続かない」とアドバイスを受ける。

小さい頃から車が大好きで、スーパーカーと呼ばれる車に乗ることが夢だった。高校 1 年生の 16 歳の時、NISSAN GT―R という車に強烈なインパクトを受けた。「当時父から、そんなに欲しいのなら自分で稼いで買いなさいと言われ、絶対にプロ野球選手になって GT-R を買おうと思っていました。」

そして、プロ野球選手となった吉田さんは念願の GT-R を購入する。プロ野球の世界で必死に頑張る中で、愛車のメンテナンスやカスタマイズをすることが趣味の一つとなった。そのメンテナンス

を依頼していたお店が、今の職場になるとは想像もしていなかった。

■社長に直談判

様々な業種を検討し悩んだ中で、やはり大好きな車にかかわる仕事がしたいと思い、現役時代からお世話になっていた販売店の社長に直接交渉した。
しかし、社長からは断られた。
プロ野球界のような華やかな世界ではないという理由からだった。「プロ野球選手というだけで人は集まってくるし、いい意味でチヤホヤされる。そんなことはこの業界では絶対にないと言われました。」
元プロ野球選手というプライドに拘ることも無く、ただ素直に好きなことを一生懸命やりたいという一心で社長に話し、特別扱いはしないという条件で採用となる。
「まだまだ覚えることも学ぶことも沢山ありますが、野球をやってきたからこそ礼儀マナーやコミュニケーション力が身に付いていると思います。入社して１年ですが充実した毎日を過ごしています。」

■悔いはない本当に楽しい

会社への出社は車通勤が認められているが毎日電車で通勤し、会社の最寄駅から徒歩 15 分、約１時間ほどの通勤時間。普通なら苦になる電車通勤さえも楽しいと話す。「一般の会社員という自覚を持つためでもありますが、電車で通勤する時間も楽しいですし、これからも電車通勤です。」



日々の業務は、見積書の作成や納車対応などの接客業務から、洗車、清掃など様々。その中の接客業務ではキャッチャー一筋だった野球経験が生きる場面も沢山あるようだ。「キャッチャーというポジションはピッチャーの調子を見極め、その時の考えを尊重し良いところを引き出していく為に沢山コミュニケーションをとっていきます。話すことや本音を引き出すことがとても大事になります。その経験から、接客時にはお客様と自然に打ち解けられるようになっているかなと思っています。」

「好きなことをやらないと長く続かない」と恩師から言われてスタートしたセカンドキャリアの道だが、「好きなことであっても最初は何もできないのは皆一緒だったはず」 と謙虚に学ぶ姿勢を持ちながら日々の業務に取り組むことを心がけている。

プロ野球選手になった時に購入した愛車について尋ねると、「ナンバープレートを外して今も車庫に置いています。一生の思い出の車なので。」と吉田さんは話す。
華やかに見えるプロ野球の世界も非常に厳しい世界で、本来の力を発揮できず若くして戦力外通告を受けることもある。「本当に野球が好きなら続けていくべきだが、やることが見つからない、思いつかないから野球に携わるというのはやめた方がいいと思います。周りの意見や考えを聞いて自分を受け入れ、沢山悩みながら自分の新しい道を見つけてほしいです。」

障害をもつ子どもたちが自ら好きなものを見つけ、身体を動かせる遊び場を創り出す



加々美 太一

1981 年生まれ。東京都町田市出身。幼少期からサッカーを始める。中学校では FC 町田ジュニアユースに所属。高校は神奈川県の桐光学園高等学校に進学。高校卒業後、関東学院大学へ進学しサッカー部に所属していた時に「東京ヴェルディ 1969」のトライアウトに合格する。大学に通いながらプロサッカー選手として 1 年間プレー。その後、シンガポールのバスティアカルサ FC に 1 年間レンタル移籍。帰国後、ザスパ草津で 1 年間プレーした後、ヴァンフォーレ甲府に練習生として参加したが選手契約をつかむことができず選手を引退。引退後は会社員として 4 年間勤務し、26 歳の時にアパレル関連会社を設立した。その後、2021 年に社団法人 FBSL（フットブレインサイエンスラボ）を立ち上げ、障害を持つ子供たちの支援を積極的に行っている。

これまでのキャリア

●1997 年　FC 町田 U-15 から桐光学園高等学校へ入学
●2001 年　東京ヴェルディ 1969 入団
●2002 年　シンガポールリーグ　バスティアカルサ FC 入団
●2003 年　ザスパ草津入団
●2007 年　株式会社デポイスジャパンを設立

●2021 年　社団法人 FBSL 設立

■好きなサッカーでプロを目指す

小学校高学年の時にＪリーグが始まり、サッカー人気が高まる中自身も地元のクラブチームでサッカーを始める。中学校の時は FC 町田セルビアの前身である FC 町田ジュニアユースでプレー。高校は数多くのＪリーガーを輩出している神奈川県の桐光学園高等学校に進学し、チームの中心選手として活躍した。
高校卒業後は関東学院大学へ進学し、サッカー部に所属していた時に東京ヴェルディ 1969 のトライアウトを受け見事合格。そこからプロの道へと進む決断をする。得意のドリブルを武器にチャンスメーカーとしてチームに貢献していたが、2 年目に当時のＪリーグチェアマンが注目していたシンガポールリーグへ期限付きで移籍することになった。1 年間の在籍後、翌年ザスパ草津に入団する。

ザスパ草津では中々活躍の場を見出すことができず、ヴァンフォーレ甲府への移籍を目指し練習生としてチーム練習に参加したが、選手契約をつかむことができず選手を引退することを決断した。



■色々悩んだセカンドキャリア

引退後、アパレル関連の企業に就職し 4 年間会社経営面も学び、26 歳の時にアパレル関連の会社を

設立。
「幼少期からサッカーをやってきて、サッカースクールやサッカーに関わることはできると思いましたが、色々悩みながら新たな領域にチャレンジしてみようと思いました」
若くして引退する選手が多い中、日本のサッカー界は選手のセカンドキャリアを支援する部分が十分ではないと加々美さんは感じていた。
ポルトガル語で「後」という意味の「デポイス」を会社名とし、サッカー選手のセカンドキャリアを支援する事業を行い、飲食店を６店舗、時計輸入販売の代理店事業もスタートさせ、自社でも選手のセカンドキャリアとして受け入れる体制を整えた。



■アスリートならではの視点を活かして

元スポーツアスリートの経験から身体を動かす時は、靴がとても重要だと思っていた。特にインソールの重要性を選手時代から痛感していたこともあり、2021 年には社団法人 FBSL（フットブレインサイエンスラボ）を設立した。

インソールを販売するのではなく、インソールを作る技術を提供する会社。怪我を予防したり、リ

ハビリを行う専門家やスポーツトレーナーに向けて、身体の特徴や症状に合わせたインソールを作るスクールを運営している。受講者を通してインソールの重要性や効果を伝え続けている。

「腰痛や肩こり、歩行障害、外反母趾、スポーツ選手の怪我の予防など、様々なシーンで効果が出ていることを実感しています。スクール卒業生からも、腰痛や怪我などの予防ができるようになった、姿勢改善やパフォーマンス向上につながったなどの声も上がっています。」

■夢は八王子でクローバーシティと言う特別特区を作る事

新たな活動として、障害を持つ子どもたちの周辺で何か役に立てることはないかと考え、先ずはその保護者から沢山の話を聞くことから始めた。
「障害を持つ子どもたちは中々遊ぶ場所がなく、健常者側も障害の知識を持っていないので接する難しさを感じていること。結果、子どもたちは引きこもりとなり、スポーツや身体を使う楽しさを知らずに過ごしているということがわかりました。」
また、ヨーロッパでは障害を持つ子どもたちが楽しめる場所や環境が普及しているのに対し、日本にはそのような場所や環境が整っていないこともわかった。

そこで加々美さんは、幸福を象徴するシンボルにちなみ、2021 年に自社の中で『クローバープロジェクト』を立ち上げる。子どもたちが好きなものを見つけ、身体を動かせる環境を作るプロジェクト。毎年イベントを開催しながら、2023 年夏には保護者たちが中心となり、子どもたちが好きなことや好きなスポーツを発見し、保護者同士の新たなコミュニティを形成する『クローバーフェスティバル』を山梨県の富士北麓公園体育館で開催した。

100 名の子どもたちを招待し、柔道オリンピックメダリストの杉本美香さん、バレーボール元日本代表の大友愛さん、サッカー元日本代表の内田篤人さんをゲストに招いて『できる！を応援　大好き！を探そう』というテーマでスポーツを楽しんで自分で好きなものを見つけてもらうイベント。

「子どもたちが楽しく遊べる環境を提供し、その体験から自分の得意分野を見つけてもらい、大人になったときに自分の個性を生かして社会で活躍できるよう、その成長の後押しができればという想いと、保護者の方々にも家族同士の新たなコミュニティが作れる機会になればという想いで開催しました。」

この『クローバーフェスティバル』は参加者からも高い評価を受け、2024 年３月にも開催。子どもたちの参加人数も 150 名まで増えた。
「この活動の将来の夢は、八王子でクローバーシティと言う特別特区を作る事です。そこでは、障害を持つ子どもたちが自ら好きな事を見つけて、好きなものを職業として選べて、そこにしっかり対価が生まれる環境。子どもたちが様々な体験をして、身体と脳を刺激する環境を作っていきたい」と加々美さんは言う。子どもたちもその家族も、楽しく好きなことが見つけられる『クローバーシティ』の誕生が今から楽しみだ。


CLOVER
PROJECT

諦めないこと、苦しみ悲しみを乗り越えて辿り着く場所がある



田本博子

元女子ソフトボール選手
シドニーオリンピック出場

京都市立勧修中学校
保健体育科教諭

ソフトボール　hiroko TAMOTO

競技との出会い

1974 年生まれ。小学校 4 年生の秋に友人に誘われ地元のソフトボールチームに入団。小学校 5 年生時にオール京都に選出される。

これまでのキャリア

●1999 年　日本代表チーム選出、ジャパンカップ国際女子ソフトボール大会出場　MVP 受賞
　　ハーレムウィークカップ出場　MVP 受賞
　　カナダカップ出場
●2000 年　シドニーオリンピック出場　銀メダル獲得
　　日本ソフトボールリーグ 1 部優勝
●2005 年　選手引退、コーチ就任
●2008 年　北京オリンピックコーチとして帯同　金メダル獲得
●2011 年　京都市立勧修中学校に教員として赴任

■高校卒業時

高校 2 年生時に国体選手に選ばれるも 3 年生時は怪我の影響もあり活躍出来なかった。高校卒業後の進路は、ソフトボールが大好きだったので大学進学は考えず、働きながらソフトボールができる企業チームに進みたいと考えていた。複数の企業チームのセレクションを受けた中で、横浜の日立ソフトウェア女子ソフトボール部のセレクションに合格した。当時はまだソフトボールがオリンピック種目ではなかったため、オリンピック出場を目標にすることはできなかった。選手時代のプレースタイルは、小柄な体格だったのでヒットを量産するよりも、とにかく塁に出て走ってチームに得点をもたらすことと、守備範囲の広い選手になれるよう日々努力していた。選手時代に一番影響を受けた人物は、当時のアメリカ代表チームのドット・リチャードソン選手。競技に取り組む姿勢や情熱に大きな影響を受けた。

■現役時代

日立ソフトウェアでは、平日の午前中は仕事をして午後は練習という日々を過ごしていた。ソフトボールが大好きで企業チームでのプレーを選択し入社したが、入社後の 4 年間は中々試合に出場することが出来なかった。5 年目になる頃から試合に出場するようになり、少しずつ自信も付き始め日本代表を目指すようになっていった。入社して 9 年が経った 26 歳の時に全日本チームのセレクションを受け、当時の日本代表チームの宇津木監督に認められ念願の日本代表入りを果たす。2000 年シドニーオリンピックではレギュラーの選手として出場し見事銀メダルを獲得した。その後、2005 年まで現役選手として活躍し、選手引退後は所属する日立ソフトウェアのコーチを続けながら、2008 年の北京オリンピックでは日本代表チームのコーチとして帯同し金メダルを獲得した。その頃はまだセカンドキャリアについては全く考えていなかった。



■競技から離れて会社も退職

2008 年の北京オリンピック終了後にソフトボールチームを退団し仕事に専念したが、1 年後に退職。退職後はオリンピアンという肩書きもありいくつかの講演会の仕事を受けていた。自身の経験を人の前で話すことで改めてソフトボールが大好きなことと、競技の楽しさを伝える側になりたいと考えるようになった。

■教員としてセカンドキャリアのスタート

ボランティアでクラブチームのコーチをやっていた頃、京都府の教育委員会から非常勤講師の話をもらい、「教師塾」に通い勉強し、翌年２校の小学校の非常勤講師として働くことになった。その後、ソフトボール協会から「京都府の特別制度で教師になる試験が受けられる」という連絡をもらい、2011 年に京都市教育委員会の採用試験（保健体育科特別選考）を受験。見事合格した。それまでは教員になりたいと思ったことはなかったが、大好きなソフトボールの楽しさも子供たちに伝えることができると思うととてもワクワクしたことを覚えている。

■子供たちとソフトボールに向き合う日々

女子のソフトボールは中学校から始める子供たちが多く、教員として、また部活動の指導者としてソフトボールを一から教えることを今でもとても光栄に思っている。競技の楽しさを伝えることができる立場となって 13 年、教員としての業務も年々広がり時には大変なこともあるが、毎日子供たちと充実した日々を過ごすことができている。

一人の中学校教員として、一人の元スポーツアスリートとして、これからも沢山の子供たちに競技の楽しさを伝えていきたいと思っている。

